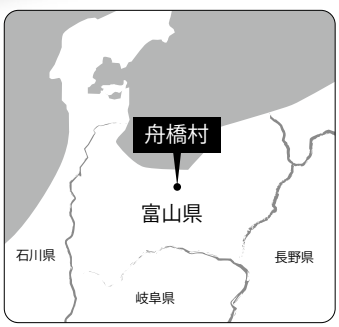
こども公園部長
～こどもたちが創る未来～
富山県舟橋村　特定非営利活動法人園むすびプロジェクト



概要

「子育て共助」を掲げる日本一小さい村、富山県舟橋村で、子どもたちと共に公園づくりの活動を推進しています。「こども公園部長」と任命された地元小学生が遊具製作やイベント企画を担当し、大学生や子育て世代を巻き込みながらまちづくり事業の一部を担っています。２０１７年には遊具設置に向けクラウドファンディングで資金を集め、指定管理者とともに遊具を設置。子育て共助のためのコミュニティの醸成に公園を活用し、地方創生事業のひとつとなる活動を続けています。



【園むすびプロジェクト】公園づくり１

活動について

舟橋村は富山県中央部に位置し、面積が３・４７平方キロメートルの日本一小さな村（自治体）です。富山市のベッドタウンとして発展し、宅地造成が行われ若い子育て世代の転入が増えたことで、１９８９年に１４５３人だった人口が、２０１０年には倍の３００６人に増えました。

しかし、核家族の割合が増加し地域交流が希薄化する中で、人口構成割合の偏りが浮き彫りとなり、将来的には人口減少や地域活力の低下が予想されました。そこで村は、富山大学と連携協定を締結して「舟橋村地方創生プロジェクト」を立ち上げました。村では「子育て世代の転入促進・出生率の向

上」を目標に、「子育て共助」のまちづくりを掲げ、地域住民が主体となって企画段階から参加しコミュニティを醸成することを目指しました。

その上で2015年、村は住民同士が共に支え合う「子育て共助のまちづくりモデル事業」を発表しました。このモデルエリアの核となるのは、村中心部の京坪川河川公園周辺に整備する「保育」と「住宅」、そして「公園」です。3つの事業を展開するために官民連携するための事業者の募集があり、「公園」での事業に造園業の新たな仕事づくりとして参加しました。

プロジェクトの舞台となるオレンジパーク（京坪川河川公園の愛称）は、芝が整備された広場で、普段は子どもの姿を見かけない公園でした。地域における財産でもある公園をどのように活用すべきか、地域にとってなくてはならない、使ってもらう方のための公園を目指すことが重要であると考えました。


【園むすびプロジェクト】水遊び遊具完成

そこで、村地方創生プロジェクトで連携している富山大学や村主催の造園勉強会などで地域振興やまちづくりについてアドバイスを受けました。そして、公園利用者と共に活動する組織「舟橋村園むすびプロジェクト」を立ち上げました。

民間企業の参入では、活動の1、2年目は子育て世代へのヒアリングや自主開催のイベントを行っても人が集まらず、ニーズを把握できないことに悩んでいました。そこで子育て支援センターとの共催・連携イベントを開催し、多くの親子連れを呼び込むことに成功するも、イベント開催時だけでなく日常的に多くの人が滞在する公園にはなりませんでした。

そこで、公園のファンを増やし、愛着を持ってもらうために、公園を一番よく使う小学生を対象に「こども公園部長」の募集を始めましたが、子どもたちの中では公園に対する禁止事項で頭がいっぱいでした。公園を自由に使って思いっきり遊べる企画を開催し、公園に来た人が仲良くなれる公園づくりを考えました。子どもたちが考えたアイデアをもとに「ひとりじゃ遊べない水遊び場」、「ひみつきち」をクラウドファンディングで提案し、寄付を呼びかけたところ、富山県内外から多くの関心と支援が集まりました。これにより、造園事業者と関わり協力しながら子どもたちは企画、資金調達、運営などの経験を通し、公園に愛着を持つことができました。


【園むすびプロジェクト】
月イチ園むすび

平成30年より、「月イチ園むすび」、年1回の「年イチ園むすび　公園フリマ」の活動をスタート。「こども公園部長」がステークホルダーとして役割を担い、公園に来た人が仲良しになれるような企画を行ってきました。子どもたちや地域の方々とのかかわりを求めて、大学生B-s☆（ビスト：園むすびのボランティア愛称）の参加も加わり、公園に来た人同士を結ぶコミュニティが徐々に形成されました。その過程で近隣住民や保護者の方も徐々に関心を持ち、活動に加わっていただけるようになりました。プロジェクトを通して、公園での「関わる楽しさ」や「繋

がる安心感」が地域の居場所となり、活動の幅が広がっていきました。

エイジレスの方や育休中の親子、出店者が年代を超えてゆっくりと交流できる「公園カフェ」、そして舟橋村だけでなく富山市の駅前や複合施設でも「出張園むすび」として来場者が楽しめる企画を通じて子育て共助の舟橋村をPRでき、そこから移住のきっかけとなるなど、舟橋村における地方創生事業の核として活動を継続しています。令和5年度には延べ参加者数が3500人を超えるプロジェクトとなり、令和4年に実施された舟橋村での地方創生事業村民アンケートでは子育て世代(20~50代)の8割の方が役に立った事業との評価も得ることができました。



【園むすびプロジェクト】
月イチ園むすび　りあるすぷらとぅーん

また、こども公園部長の取り組みでは令和5~6年に渡り先輩からの意志を引き継ぎ公園の魅力向上のための「みんなとだから楽しめるブランコ」をコンセプトに行政や村長、議員へのプレゼンを実施。提案したブランコが令和7年に設置され公園もリノベーションを続けています。

プロジェクトが始まった当初は人影まばらだったオレンジパークが、様々な世代の方が交流する場所へと生まれ変わりました。公園を通じて目指したコミュニティの醸成は様々な相乗効果を生み出すことができました。「この公園があるから移住してきました」と、安心して子育てができると感じた方が舟橋村に移り住むケースもあり、転入促進の一端を担うことができました。

また、造園業の新たなパークマネジメント事業として活動の幅が増えたことや、プロジェクトの中心的ステークホルダーである「こども公園部長」は、学校以外の活躍の場となっており第3の居場所として役割を担っています。

これからも公園を通じて~みんなの場所をみんなで育てる~この活動を継続していきたいと考えます。

(特定非営利活動法人園むすびプロジェクト
代表理事・金岡不二子)



【園むすびプロジェクト】年イチ園むすび



【園むすびプロジェクト】ウォーターパーク